

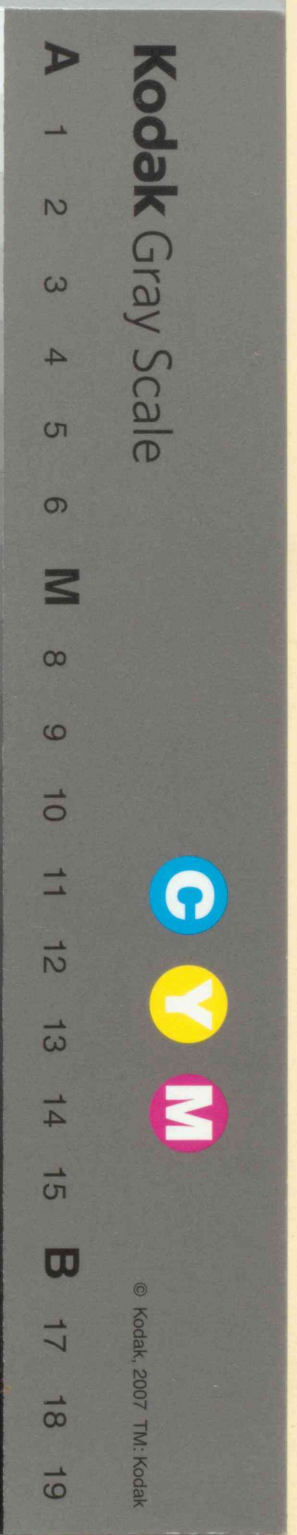
實業
新日本讀本
高級用
卷一

教科書文庫
4
810
44-1914
2000054283



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

43330

教科書文庫

| |
|----------------|
| 4 |
| 810 |
| 44-1914 |
| 20000 54283 |



中央図書館



業實新日本讀本 高級用 卷一

目次

| | | |
|---|-------|----|
| 一 | 山紫水明 | 一 |
| 二 | 國體の精華 | 一〇 |
| 三 | 遊墨堤記 | 一六 |
| 四 | 漢詩二篇 | 二二 |
| 五 | 事務の才幹 | 三三 |
| 六 | 京都より | 三三 |
| 七 | 論語五章 | 三三 |
| 八 | 早蕨 | 三六 |

目次

275.9
Roll

教科書文庫
4
810
44-1914
2000054283

六盟館編輯所編纂

業實新日本讀本

東京 合資六盟館 會社

広島大学図書

2000054283



| | | | |
|----|--------|-----|----|
| 九 | 故郷 | (一) | 三九 |
| 一〇 | 故郷 | (二) | 四四 |
| 一一 | 鴻門之會 | | 四八 |
| 一二 | 小品三篇 | | 五一 |
| 一三 | 紹介披露 | | 五四 |
| 一四 | 人臣の道 | | 五八 |
| 一五 | 楠氏論 | | 六五 |
| 一六 | 海と日本文學 | (一) | 六六 |
| 一七 | 海と日本文學 | (二) | 七三 |
| 一八 | 雜説 | | 八一 |
| 一九 | 故事熟語 | | 八二 |

| | | | |
|----|------------|-----|-----|
| 二〇 | 諒闇 | | 八三 |
| 二一 | 明治天皇大葬儀の誄詞 | | 八七 |
| 二二 | 死と永生 | | 八九 |
| 二三 | 郭橐駝傳 | | 九五 |
| 二四 | 世界の四聖 | (一) | 九七 |
| 二五 | 世界の四聖 | (二) | 一〇五 |

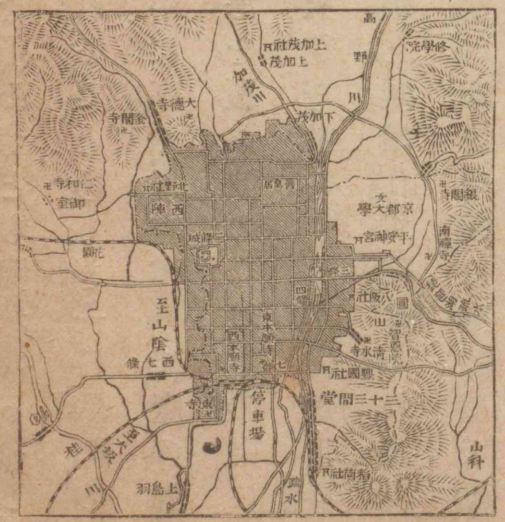
高級用卷 一目次終

實業新日本讀本 高級用卷一

一 山紫水明

山紫水明の語は、よく京都の景色をいひ表はせり。何處の山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむるなるを知らば、三面を山にして土地濕潤、水分を含むこと殊に濃やかなる京都の朝な夕なが、

山紫水明



いかに變化に富めるかは、説明を須るすとも明かなるべし。嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日驟雨の至るを見る。疾風さと吹き、浪俄かに高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうちに重なりくく、て海を覆ふ。波の音は雲の中に入り、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす。波か雷か、世界はただ一暗黒の中に没し去るかと思はれて、凄じかりき。かくの如く壯絶なる景は、わが数年の滯留中、遂に京都にては見ることを得ざりき。

されど、下京より吉田に通ひたる朝なくく、の景色の、今にも恍惚として眼前に在るを覺ゆ。ひき渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の一つ一つ彼方へくくと薄くなりて、向ふに寝た

る東山は、有るか無きかの夢より未だ覺めやらす。吉田の岡に並び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く薄く、花賣る少女の姿は隠れて、聲ぞまづ朝靄を漏れ來る。時雨の景色のまたよその國には見られぬ様よ。愛宕の峯を覆ひて白く光りたる薄布の、さては、時雨と思ふうちに、はらくくと面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて直に東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝるやさしき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。

温帯の地と雖も、大陸の内部は、寒氣凜々たる冬期は直に烈日赫々たる夏期となり、氣候激變して其の間に和煦の時季を見ず。海岸は温暖なるところ多きかはりに、年中春の

如く秋の如くにて、夏・冬の峻酷なる風物を感じず。四季交代の順序の明かなること、わが國の如きは少く、わが國にても、花も紅葉もなき浦曲などは、到底、京都の四季のながめの面白きに若かず。

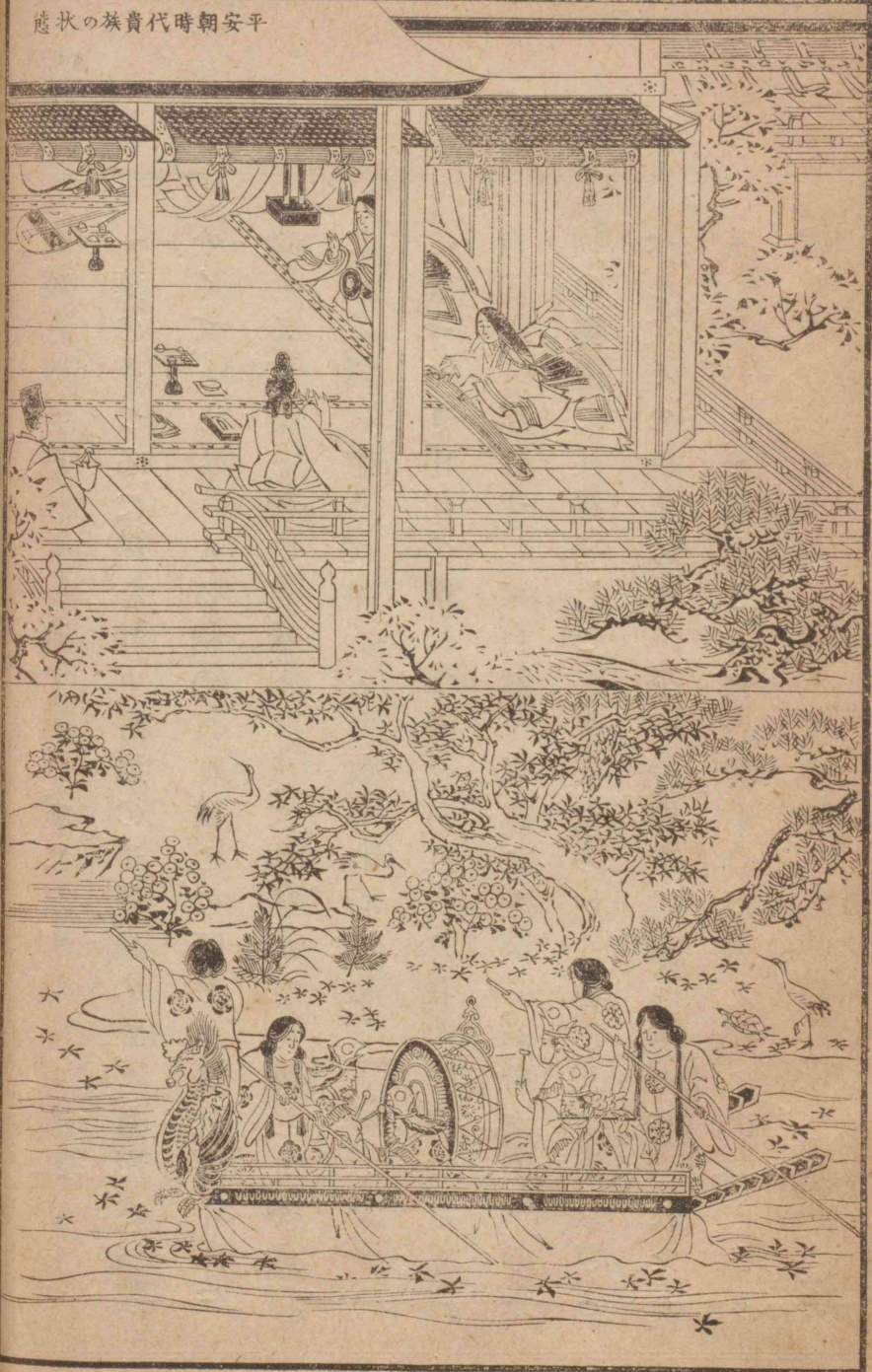
春立つと思ふばかりに、四方の山々霞こめ、空の色、水の色さへ昨日に變りて覺ゆ。若菜つみ小松曳くも新らしき年のしるしなり。梅の花散りて鶯老を啼けば、柳の緑、桃の紅、花の音信あわただしく、夢かとはかり青葉になりぬ。垣の卯の花、花桶を過ぎがてにする郭公の、しばらくして聲もせずなりぬるは、時知りぬるとわけてめでたし。五月雨に軒の玉水ひまなく、公事物語も途絶えがちなるに、晴るれば、やがて暑さ

公事

六月晦の大
祓

の凌ぎ難き、それも一時、名越の祓に夏も終りぬ。涼風立ちて一葉の落つるに秋を知り、野邊の千種、蟲の聲々、月影さへ隈なくて、とりとゝなる物の哀れはこの頃ぞまされる。千入に染むる紅葉を秋の名残として、木枯騒がしく、淋しき冬の霜に痛み、雪に慰みて、早くも年は暮れ行きぬ。

愛すべき山川の懷に涵養せられたる我が國民は、永く薫育の恩を忘れずして、自然を思ふこと深く、わけて四季の景物の變遷に注意せしこと、平安朝の如く著しきはあらざるべし。代々の撰集の部を分つや、四季は最も重んぜられたり。花や、月や、その折々ごとに合奏、歌合は絶えず。この時代より盛んなりし五節句も、起源は多く支那にあるべしと雖も、よ



平安朝時代貴族の状況

く國風に融化し、またよく季節に調和したる遊樂なり。

白馬(しらま)の節は勇ましく神々しく、曲水(まがみづ)の宴の上巳(うへみ)の節とな

正月七日
三月三日
五月五日

りたるもやさしく、端午(たのひ)は第一に盛んにして、淀野(よどの)にひきし

九月九日

菖蒲(あやむすぶ)の根を競ひ、蓬(よもぎ)を葺けば、薬玉(いすゞ)の簾(すだれ)にかゝりたるも興あ

り。七夕(たなばた)の空澄み渡る頃には、銀河(ぎんが)を隔つる二星(ふたほし)を仰ぎ、重陽(ちゆうやう)

には菊花(きく)の秋に驕れるを愛して、吟誦(ぎんず)夜を覺えず。近世に至

りて、算盤(そろばん)弾く丁稚(ちやぢ)、剃刀(かみばし)片手の下剃(かみ)までが『梅咲くや』初雪(はつゆき)や』

めたるなりとはいへ、また一は千年以前の祖先が、深く四季

折々の景色に愉悅せし結果なりといはざるべからず。社會の進歩するに隨うて、人工を以て自然に反抗する力

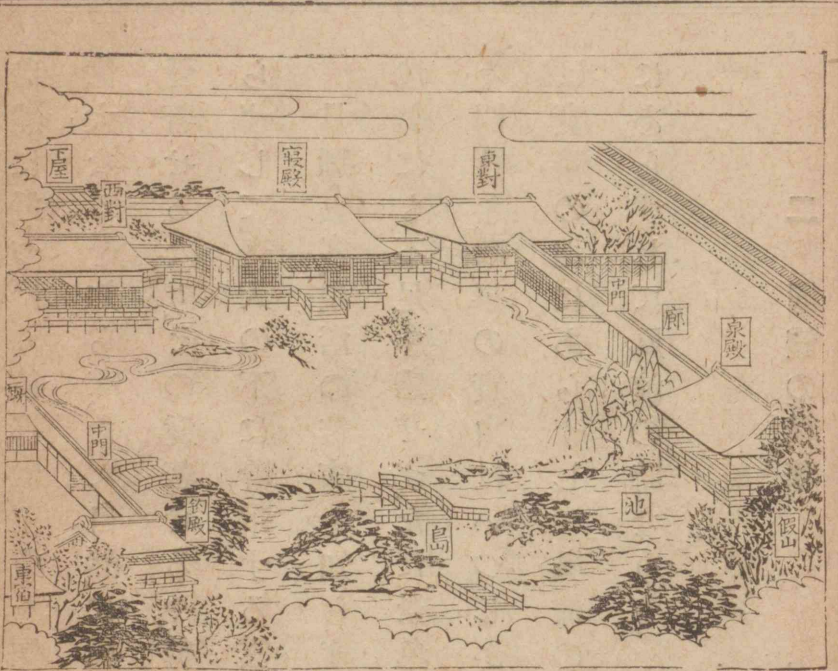
愉悅

は増加す。これ、やがて文化の恩澤なり。今日開明の民は、煉瓦の家屋風もすかさず、室内の煖爐春長しへなれば、何處にか北風のすさぶを知らん。夏は山地綠蔭深き處、海岸風涼しき處に暑を避く。都會の住居、軒たち續きては、月の盈ち、虧け、星影の動くも氣づかず。たとへば東京の子供の、山といへば飛鳥山の外を知らず、杉はと聞けば削れる板とのみ思へる類多し。

平安朝の京都は、いまだかくの如く人口稠密ならず、文化進歩せず。隨うて其の住民も、人爲の力を以て自然を左右せんとするほどの欲望を有せずして、却つて山川の美に憧憬せる本性は、あくまでこれに同化せんと試み、服飾の色彩、第

憧憬

平安朝時代の第宅



山紫水明

宅庭園の配置、一に自然を模範に取る。平安人士の行動の、いかに美はしく、平安京の山紫水明と融和して天人相映發せるかを見よ。人力を能ふかぎり活動せしめ、鬼神を役して自然を己が用に供せしむるは彼等の事にあらず。自然は人間に近づかずして、人間は

愛著
吟哦

自然に近づけり。彼等は工業を知らず、科學を知らず、人力の偉大なるを知らず。ただ自然に屈從せり。屈從せるにあらず、愛著せるなり。その愛著せるや、労働に餘念なき蟻の如くならずして、青天の下に吟哦する雲雀の如し。

月卿・雲客、生活の苦痛を知らず、運輸の便に乏しき京都の地勢にも不足を感じず、ただ景色の美にあこがれて、烏兔匆匆四百年。政事の實力はいつしか出でて、關東に去りぬ。京都は實務の地にあらずして風流の地なり。平安朝は實務の時にあらずして風流の時なりき。(藤岡作太郎)

二 國體の精華

わが日本固有の國體と、國民道德との基礎は、祖先教に淵源す。祖先教とは祖先崇拜の大義をいふ。わが日本民族の固有の體制は血統團體なり。血統團體とは、民族がその同始祖を敬愛するに由りて、平和の秩序を維持するをいふ。小にしては家を成し、大にしては國を成す者なり。

祖先崇拜の大義は、血統團體を構成し維持する源由たると同時に、血統團體の存續は、亦祖先崇拜の大義を鞏固にし、深遠にする成果あり。二者相待つて消長し須臾も離るべからず。而してわが固有の國民道德たる忠孝・友和・信愛の道は、一に皆祖先崇拜の大義に淵源し、血統團體を保維する軌轍たり。わが堅固なる家國の體制は祖先教の基礎に存し、これ

を千古に建て、これを萬世に傳ふるは、わが民族の特質にして、國體の精華たる所なり。

人は獨立孤存し得べきものにあらず、共同團結もつてその生存を全うす。而してその團結する源由と形體とは固より一ならず。但し利害をもつて集散し、約束をもつて協和を維持するものは、その團結固からず、又久しからず。利害の異同は生活の情況に隨ひて時に變轉し、人爲の約束は復人爲をもつて解除することを免れざればなり。血族相依るは自然の團結なり。兒孫が父母の保護の下に團欒するは社會の始めにして、氏族が同始祖の威靈の下に國を成すは天賦の團結たり。血族相通ずるは天然の連鎖なり。人爲をもつてこ

れを絶つことを得ず。利害の觀念の上に超越し、敬愛の至情に由りて、離るべからざる共同生存を成す者は、血統團體なり。

血統はこれを祖先に受け、子孫に傳ふ。故にその團結は永久なり。血族關係は利害をもつて離合斷續するを得ず。故にその團結は鞏固なり。而してこれを統一するものは祖先の威力なり。祖先の威力は對等の約束にあらざるが故に、敬愛の情厚く忠順の念深し。家に在りては、家長は祖先の威靈を代表し、家族に對して家長權を行ひ、國に在りては、天皇は天祖の威靈を代表し、國民に對して統治權を行ふ。家長權と統治權とは、共に君父がその祖先の慈愛する子孫を、祖先の威

靈に代りて保護する權力なり。吾人の今日あるは、吾人の祖先が血統團體を建設し、維持し、遺傳したる餘惠なり。

何が故に血統相近きが相依りて家を成し、氏族を成し、又國を成したるか。祖先を崇拜し、その威力と慈愛との下に、生存の保護を全うせんと欲する天性の至情に外ならざるなり。汝の父母を敬愛し、その慈愛なる保護の權力に従順なる至情は、延いてこれをその父母の父母に及ぼすべし。吾人の祖先の祖先は、即ちかしくもわが天祖なり。天祖は國民の始祖にして、皇室は國家の宗家たり。父母拜すべし、況んや一家の祖先をや。一家の祖先拜すべし、況んや一國の始祖をや。家長の位は祖先の靈位にして、皇位は天祖の靈位なり。父母

は現世に在る祖先たり、天皇は現世にある天祖たり。父母に孝なるべき所由は、即ち皇室に忠なるべき所由にして、これを一貫する國教は祖先の崇拜なり。この大義は吾人の祖先が家國を成したる基礎にして、吾人がこれを永遠に維持する軌道たるものなり。

人は信仰に因りて動作す。限定せられたる人智は、宇宙の現象を總合して、これをその根柢の眞理に證明し、絶對の理法を自覺して行動すること能はざればなり。吾人の祖先は、肉體の外に不死の靈魂あることを確信し、又子孫を慈愛する父母の威靈は、顯界においてその肉體を亡ふとも、なほ幽界に在りてその子孫を保護することを確信したり。これ祖

先崇拜の大義の淵源にして、敬神のわが國教たる所由なり。
わが固有の國體・民俗・祖先の祭祀を重んずるより重きは
なし。家は祖先の威靈の住む處、國は天祖の威靈の住む處に
して、祖先の威靈は家國を防護す。吾人は祖先の生命の繼續
にして、子孫は吾人の生命の延長たり。祖先の祭祀を不朽に
絶たざるは、吾人の肉體において代表せらるゝ祖先の生存
を永遠に傳へんと欲するなり。祖先と吾人と子孫とが家國
の觀念において同化し、その繁榮して永久なる存在を全う
する大義こゝに存す。祖先の靈位を現世に代表する君父に
忠孝なるは、祖先に忠孝なるなり。君父が臣子を愛護するは、
祖先がその子孫を愛護するなり。夫婦の和、兄弟の友、民族の

共愛、悉く皆わが同祖の祭祀を重んじ、これを永遠に傳へ、祖
先の家國の鞏固にして永久なることを欲する、祖先の遺志
に適從する道ならざるはなし。

これを要するに、わが祖先崇拜の大義は國民の確信に出
て、不朽の國體はこれに由りてその基礎を立て、國民の道德
はこれによりて深厚なり。斯の國、斯の民を、千古に溯り萬世
に亙りて保持する者は、此の國體の精華たる我が固有の祖
先教の力なり。
(繼承八束 愛國心)

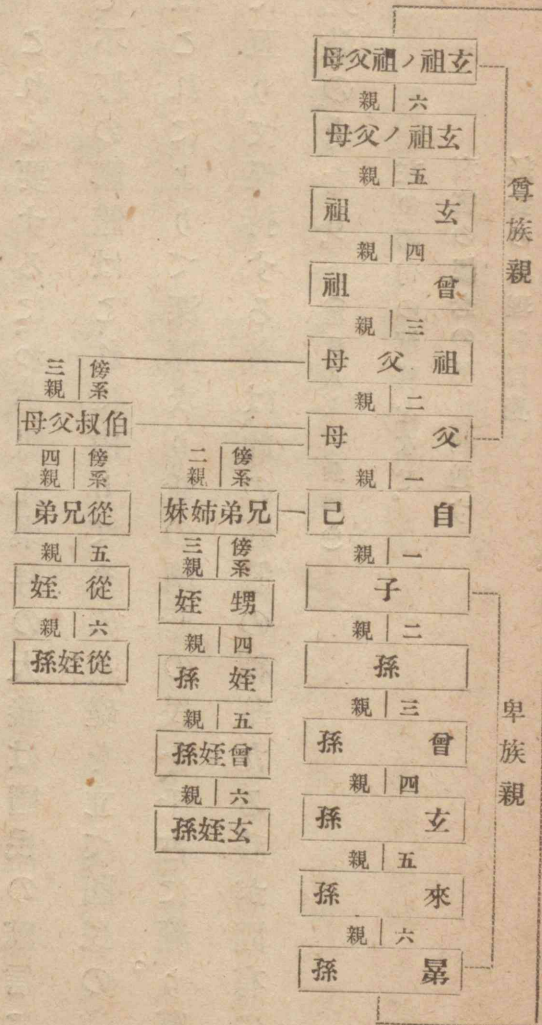
練習 左の語句の解釋をなせ。

利害の觀念の外に超越す

絶對の眞理を自覺す

獨立 孤立 社會 國家 顯界 幽界

直系親族



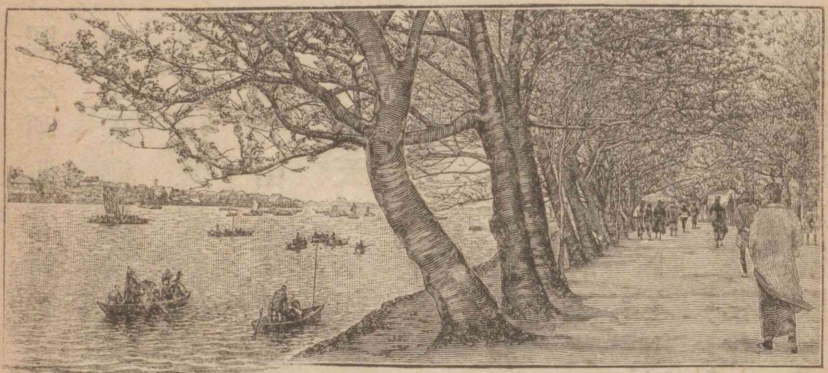
考試

三 遊墨堤記

今茲春、考試甫訖、僚友相誘、遊墨西之超然樓、樓係松本醫員下條氏別墅。余適病齒不赴。後數日、齒墮痛除、乃拉童子以遊墨

み吉野や櫻
一樹に先き
見せて山口
しるくにほ
ふ春風
大納言雅
章

空湧



遊墨堤記

堤意欲殿於前遊也。抵三廻里、則花木兩三株欣欣邀人。古歌所咏芳山之口、一樹先導者、想應與此同趣。行數百步、樹滋多、花滋穠。清流碧疇、左右映帶。其對岸樓閣高低、隱見于綠蘋翠楊之表。所謂超然樓應在此際。

墨堤凡十里、兩畔皆櫻。淡紅濃白、隨步媚人。遠者如招近者欲語。間有少曲折。自第一曲東北行三四折、以至木母寺而窮。曲曲回顧、花幔蔽地、恍疑無路。排而進、則如白雲空湧、杳不見際。涯低

松崎儻堂

回之頃、肌骨皆香、使人欲化蒼仙。既而夕陽在林梢、落花飛亮、閃閃乎垂柳疎松之間。長流滾滾、潮滿石鳴。西仰芙蓉、突兀萬仞。東瞻波山、翠鬟如拭。又宇宙之絕觀也。先師儻叟嘗語予。吾歷覽京師及芳山之花、然風趣莫及墨水者焉。洵然。

須臾天陰風起、落英繽紛。遊人匆忙散去。而暮鐘之聲、沈沈度

花間。余於是悄然有感焉。天有陰霽、花有開落。而人亦不能無老

少盛衰。自顧艾年加七、齷然齒復墜矣。今春所拔舉子數十人、大

率青年妙齡、前途萬里、皆邦家之英也。自今以往、其人學益進、才

益秀、以供天下之用、則與此地之花、真足競其美。儻或一舉自喜、

頽墮萎靡、如落花化泥、則吾輩無狀、白首叩地、以謝謬選、未足贖

過也。既遊之後數日、僚友會超然樓者、各有記若詩篇、見示不堪

艾年
齷然

伎癢

花朝

伎癢乃追記之、以殿於卷尾。云慶應改元乙丑、花朝後三日。

(鹽谷世弘 岩陰存稿)

四 漢詩二首

花朝下澱江

桃花水暖送輕舟、背指孤鴻欲沒頭。

雪白比良山一角、春風猶未到江州。

江南春

千里鶯啼綠映紅、水村山郭酒旗風。

南朝四百八十寺、多少樓臺煙雨中。(杜牧)

五 事務の才幹

蓬萊、方丈、瀛洲、
沅瀆

羽衣・星冠・竹杖を三山の邊に寄せて、琪樹の花に對し、霞觴を擧げて、沅瀆に醉ふを一生の能事とせば即ち已む。苟も此の活動せる社會に躍り出でて雄飛せんと欲せば、必ずや大いに實務に注意せざるべからず。見よ、白駒足早み、機は忽焉として來り忽焉として去る。しかも執らざるべからざる事務は刻々吾人を襲ふにあらずや、圍むにあらずや。

吾人は此の重圍中に惱殺せられんか、そもまた紫電一閃圍を衝いて出でんか。若し前者をとらば、轆轤落魄人生の蹉跎たり易きを嘆ずるに至らん。後者をとらば、必ずや運命の舟に眞帆かけて成功の彼岸に達せん。果して然らば、事務の

轆轤落魄

恬然

才幹は、實に吾人の前途を定むる一因といはざるべからず。然らば如何にしてか事務に長すべき。曰く時を惜まざるべからず。曰く書翰を認むるに慣れざるべからず。此の二つのものは、謹慎精細なる事務家の一日も忘るべからざることとに屬す。我が國時計の輸入ありて僅か四十餘年、時の觀念未だ深く人心に刻まれず、嘆ずべきの至りなり。試に寒村僻邑に入りて隴畝の老農を見よ、河陽の漁翁を見よ。彼等に時を尊ぶ觀念なし、彼等に時を惜む慣習なし。彼等約するところあるも、期に至つて履行せざるなり。履行せざるも恬然、平然、相關知せざるものゝ如し。豈驚かざるを得んや。然れども、こは獨り寒村僻邑のみにあらず、四千萬の同胞多くは皆是

なり。百萬都城の人と雖も、其の此の如くならざるもの果して幾何ぞ。

然れども、幸に茲に此の弊を矯むる二大勢力あり。何ぞや。學校生活および全國皆兵制度即ち是なり。これらは皆時を基として義務を割りあてたるもの、時をあやまれば罰忽ちこれに隨ふ。青年學に就くもの四百萬を以て數ふ。壯年役に服するもの亦幾萬ぞ。次代國民の中堅を形づくるものは概ね此の中にあり。故にこれらの學生、兵士、進んで青雲に入るも、退いて田野に耕すも、時の觀念を失はざらんか、庶幾くは數千年馴致せる此の流弊を打破することを得ん。余が輩不幸にして時を惜まざる空氣の中に長じ、時を惜む習慣未だ

介焉

強固ならず、一日外人と約するあれば、心裡介焉として安んぜざるを覺ゆ。正にこれ一段の修養を要するところとす。

迂愚

凡そ此の繁劇多事の世に、一々歩を運び車を驅つて人の門を叩き、始めて萬般の事務を辨せんとするは迂愚の極なり。既に郵便の設けあり、これを利用せざるべからざるは三尺の童子もこれを解せん。故に今日事務家たらんものは、須く手翰に巧緻にして且敏快ならざるべからず。然るに我が國人こゝに意を致すもの少く、又その必要を説くものなし。豈慨すべきことならずや。

試にこれを歐人に見よ。其のこれに長ぜることは寧ろ驚くべきものあり、殊に周旋家、事務家において然るを見る。彼

英國の政治家

廟廊

幕々
亞非利加洲
メビヤの都

等は如何に繁多の中に身を投ずるも、一日二三十通の書簡を自ら裁せざる者なしといふ。見よや、政海波瀾驚いて風急に、政治家といふ政治家皆衣を拂つて起つ時にあたり、一身の浮沈と一黨の消長と一國の盛衰とを目前に見ながら、千古の異材デスレリーが悠々筆をとりて其の妹に通信する状を。或は曰く『余は明日演説せん』と。或は曰く『日ならずして廟廊に翱翔せん』と。或は曰く『近日冠を掛けて去らんと』。彼が境遇と、彼が心情と、彼が家庭と、彼が骨肉相愛の情とは、集めて彼が手翰集にあり。

又見よや、悲風千里吹き荒みて止まず、妖雲羃々カルツの城。陥らんとす骨を晒さんか、援兵は至らず。捕虜たらん

同教徒の法
主
英國の軍人

か、マヂーの軍は雲の如し。此の際、此の時、近世の奇傑ゴルドンは、從容書を認め、萬里鴻雁に託して意を致し、を變を見て其の平素を知るべし、平素を見て其の成功を知るべし。此の大政治家と此の好將軍と、其の芳名の今日に薫しき所以、亦何ぞ驚くに足らんや。

磊落
齷齪
清談

由來、東洋の豪傑、多くは磊落に、事務を以て刀筆の細事とし、皆高吟して曰く『大丈夫豈細事に齷齪たらんや』と。故に其の言は壯なりと雖も其の論は空、其の舉動は勇なりと雖も其の事蹟は見るに足らず。然れども真正の豪傑は然らざるなり。請ふ之を事實に徵せん。西晉の陶侃の如きは其の人なり。當時、人多くは清談を好み、空理に流れ、老莊を學んで無爲

三國時代の
人

帷幄

三國時代の
人

布衣

*新井白石と
安積澹泊と

を喜び、事務の何物たるかを知るものなし。侃獨り毅然として一世の風に抗し、朝に甕を門外に運び、夕に甕を門内に運ぶ。事務家たる知るべきなり。傳に曰く「遠近書疏無不答、筆翰如流」と。その書簡に妙を得たる知るべきなり。孔明も亦斯くの如き人ならんか。身三軍に長として帷幄に計を畫し、なほ日に罪二十以上を聽く。終に司馬懿をして「孔明の勵精此くの如くんば其の生や長からず」と豫言せしむるに至れり。事務に長けたるにあらずんば曷ぞよくせん。かれ眇たる南陽の一布衣を以て、一舉して天下の風雲を捲き、漢室を興隆せしめたる所以のもの、豈此の特性に資らざるを知らんや。

本朝に於ても、元祿享保の儒者多くは手簡に巧なりき。新*

惟永壽二奉青
龍左泥歎霜月
之靈皇極之曰
魯相河南京韓
君退帷大古革
胥生皇雄
育 實俱制元
道百王不改元
子近聖為漢定
道自天王以下
至于初學莫不

佐久間象山筆 永壽禮器碑文

有馬宮合別久太郎
昔獲河買沙山川後有恩過三十
年越坐憑汝扶竹力談通 皇
哉刻るる泉 家輝 印

鼓の龍をるる
ありきくは、ふりやうり有馬のありきくは
うりやうりやは
ふりやうりやは
ありきくは、ふりやうり有馬のありきくは
ありきくは、ふりやうり有馬のありきくは

有馬宮合別久太郎
扶竹竹丈人浴有馬温泉
温 君越有為摩沙重向
公門法委忙任僕不痛與馬之一湖炎夜六
恩波
任 家輝 印

杏坪・梅颯・頼山陽の合作 (田中伯爵藏)

安手翰を讀まば、誰かこれらの文豪が、漢文のみならず尺牘にも亦巧妙精緻を極めたるを嘆ぜざるものあらんや。

徂徠先生答問書を見れば、誰かまた支那の古文辭に心酔せる文豪の手に成れる候文の、極めて通俗に極めて簡明なるに驚かざるものあらんや。山陽外史又特に、書簡を善くせり。

而して、往復の書一々自ら筆を執りてこれを裁せざるはなかりき。佐久間象山亦これに秀でたり。その文朗々として誦すべし。特に象山の書の如きは、多くは京都の間に往



佐久間象山の肖像

來し、萬死の途に出入せし時に成りしものなりといふを聞くに及んで、余は轉た象山の象山たる所以を想起せざるを得ざるなり。

跼蹐

嗚呼、我が國は、今や日本の日本にあらずして世界の日本となれり、鎖國的日本にあらずして膨脹的日本となれり。豈豆大の天地に跼蹐して能事了れりとすべけんや。世界の旅人とならざるべからず、世界の出稼人ともならざるべからず、世界の貿易者ともならざるべからず、學術の探檢家ともならざるべからず、又世界と通信する人ともならざるべからず。この時において書翰に慣れずんば、何をもつてか用を辨ずるを得ん。漫に書記ありといふことなかれ、自筆と代筆

と同じく自己の書翰たるも、その人を動かすにおいて、その社會を支配するにおいて、その優劣果して如何ぞや。

文章は思想の表彰なり、心情の描寫なり。代筆をもつて思想の表彰完全に行はるべしとするか、心情の描寫遺憾なしとするか。吾人は斷じて否と答へん。吾人の見を以てすれば、手翰は常に事業の上に必要なのみならず、社交上にも亦必要なり。若し此の言を疑ふものあらば、請ふ、これを西人に見よ、これを東人に見よ、これを古人に見よ、而してこれを今人に見よ。苟も社會に影響を與へたる士ならんには、必ずや此の好習慣あるを發見するに難からざるべし。

(島田三郎 修養叢談)

續

一、次の語句を解釋せよ。

轆轤落魄人生の蹉跎たり易きを嘆ず

豆大の天地に踟躕して能事了れりとなす

惱殺 尺牘 青雲に入る 冠を掛く

二、「果して」「必ずや」を含める二つの短文を作れ。

六 母に上る

五月二十七日日出の尊書、只今相達し拜讀仕り候。まづ以て御暑氣あたり早速御復常の御様子安心仕り候。當年は此の地も頓に熱く候ひし處、この五六日又怪しからぬ涼氣私ども行水などんと相止め申し候位に御座候。この地男子出生の儀、報を得させられぬ以前の御狀と相

文政八年山陽四十六歳の時なり

三男三木八郎(後に三樹三郎)

* 山陽の妻

見え候。大方向違に相達し候事と存じ奉り候。その後何の申分なく肥立ち申し候。堅固の兒と相見え候。梨枝も常の如く起つたり居たり世話いたし居り候。御歌友瀧原夫婦去年のことを存じ出で招き申し候。別紙歌出來申し候。私例の習はぬ經を、
たらちねとまとるし人と酒くめば
去年のあそびのこゝちするなり。
鴨川の小魚、油たきの茄子、鮎のさしみ、名護屋味噌、鰯のせんばなど、皆々御存じの料理なるが、大の喜びにて御座候。さて月に乘じて野中まで送りまゐり申し候。瀧原が三木八を賀し候歌は御目にかけて候ひしかと覺え候。瀧原へ遣

母に上る

三二三

蘆庵二十五
回忌

はさるべき小澤追悼の御歌、銀封相添へ早速遣はし候。その後の書状いまだ参らず候か。

この度第一御禮申し上げべきは、夜學又は夏午睡の裾懸に仕るべき旨にて、小夜著地遣はされ候事に御座候。午睡は仕らず候。夜學はこれに對しても屹度仕るべく、慈母の賜、永く以て頂戴誠にあり難き義と數回遙拜感泣仕り候。とかく酒過ぎ候ふて、ただちに寝ね候事時々これあり、この癖相止め、神邊先生のごとく、屹度量を相定め、酒後にても夜學出來候ほどに仕るべく、追々燈火親しむべく相成り、今日明朝の際一年の半に御座候。たしか先君子の御誕生日も今日と存じ奉り候。これを立誓の日といたし、久し

菅茶山、備
後神邊の人
山陽の師

山陽の父惟
完、春水と
號す

山陽の次子
名は復、支
峰と號す

頼山陽の眞
筆

きものに御座候へども、うかうか仕らず出精不朽の業を成し申したく存じ候。何卒御戒の御歌頂戴、座右に掛け置き候ふて、養生、長壽、家のため、身のため、斯文のために仕りたく、他人の異見より十倍と存じ奉り候。
又二に何よりの品御恵み下され、早速頂戴致させ、何ぞ調へやり申すべく候。梨枝もあり難がり居り申し候。

雲形山和吳歌越水天鵲村青一葉萬
里河舟天草洋煙横道宮日漸
波曾詭太向船明似月

西遊其舊也言八百
山向彈正公多時己丑九月去遊也十二年矣 表

山陽の長子
名は元協、
華庵と號す

頼杏坪、山
陽の叔父

餘一石風呂相應仕り候や。三王外記正續とも相達し申し候。コツプも相達し候。茂記子どの、形見と別して永く相用ひ申すべしと、寺川へ御傳へ下さるべく候。

南大人國志の事にて終日御勤仕のよし、暑さの時何卒御保養專一に候。

この涼しさに酒もち申すべきか。又々伊丹をさし上げ申すべく候。これは追便に仕るべく、その節を申し留め候。頓首。(頼襄)

七 論語五章

葉公語孔子曰、吾黨有直躬者、其父攘羊、而子證之。孔子曰、吾

黨之直者、異於是。父爲子隱、子爲父隱、直在其中矣。

子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身、與朋友交而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣。

曾子曰、可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪也。君子人與、君子人也。

子張問行。子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦、行矣。言不忠信、行不篤敬、雖州里、行乎哉。立則見其參於前也、在輿則見其倚於衡也。夫然後行。子張書諸紳。

子曰、由也、女聞六言六蔽矣乎。對曰、未也。居、吾語女。好仁不好學、其蔽也愚。好知不好學、其蔽也蕩。好信不好學、其蔽也賊。好直不好學、其蔽也絞。好勇不好學、其蔽也亂。好剛不好學、其蔽也

也^ヤ狂。

八 早 蕨

早蕨が握りこぶしをふりあげて

山のよこづらはる風ぞ吹く。

(蜀山人)

あらそはぬ風の柳の絲にこそ

堪忍ぶくろ縫ふべかりけれ。

(鹿都目眞顔)

歌よみは下手こそよけれ天地が

うごき出してたまるものかは。

(石川雅望)

菜もなき膳にあはれはしられけり

しぎやき茄子の秋の夕ぐれ。

(唐衣橋州)

九 故 郷 (二)

何をか故郷と云ふ。其の出産したる地方なるか、其の成長したる地方なるか、其の故郷の區域は面積方幾里なるか、其の出産成長したる村落を以て故郷と云ふか、郡を以て故郷と云ふか。人の立つ所の位置に依りて、見る所の眼孔によりて、故郷も亦一なる能はざるなり。

一村落よりすれば、其の三五の近鄰は故郷なり。一郡より

すればその一村落は故郷なり。一縣よりすれば其の一郡は故郷なり。一地方よりすれば其の一縣は故郷なり。一國よりすれば其の一地方は故郷なり。世界よりすれば一國は故郷なり。宇宙よりすれば渾べて吾人々類の棲息する地球は故郷なり。

然れども、これ未だ以て故郷の眞意を説明するに足らず。故郷は必ずしも客觀的の土地にあらず。唯其の人の心に忘れんと欲して忘るゝ能はざる最初の感觸の心に刻まれたる處、これを故郷といふのみ。古人の詩に曰く、

客舍并州已十霜。 歸心日夜憶咸陽。
無端更渡桑乾水。 却望并州是故郷。

賈島(中唐の詩人)
今の直隸省内地
陝西省鳳翔府
直隸省内芦溝河

と。此の時に於ては并州却つて故郷の感あるなり。然れども愛郷の念最も深きは、最も神聖なる聯想のこれに伴ふに在り。只これ一片の青山のみ、然れども吾人父祖の骨を埋めたる處と思へば、風に臨んで涙流るゝなり。ただこれ茫々たる原野のみ、吾人の祖先が忠義の爲に千兵萬馬の間を騁馳し、その碧血を野草に染めなしたりと思へば、懷舊の感勃々として來るなり。ただこれ一株の栗樹のみ、然れども吾人が少年の時に其の兄弟姉妹と其の下に戯れ遊びたるを思へば、恰も昔日の我、昔日の兄弟姉妹、昔日のわが家の境遇、恍然として眼中に入るなり。

人の故郷を愛するは、必ずしも山水の絶佳なるが爲にあ

らず。露西亞人は白熊と同居するも故郷を以て最愛の境土となすなり。倫敦人は其の混々たる怪霧を以て却つて誇るべしとなすなり。故郷は一種のインスピレーションなり。思ふて故郷に至れば、無言の青山は猶これ千萬丈の記念碑の如く、茫々たる原野も猶これ舊時の血歴史かと思はる。一木一草の微と雖も、尙千絲萬縷の情濃かにして、傍人の得て知る所にあらず。その斯くの如き以所のものは何ぞや。

人は過去・現在・未來の三世に住す。三世中最も短きは現在なり。最も明白なるは過去なり。最も測り知るべからざるは未來なり。吾は一なれども時に由りて異なるなり。過去の吾は現在の吾にあらず、現在の吾は未來の吾にあらず。何が故

に現在は最も短しとするか。一秒時間前は過去なり、一秒時間後は未來なり。然らば現在の吾とは只一秒時間の吾にあらずや。恰も垣柵中を走る馬の如く、後蹄は既に過去の領分たらんとし、前蹄は將に未來の領分たらんとす。現在の吾は閃電も啻ならざる寸刻に在るのみ。故に人一生の間、その過半は過去と未來との爲に支配せらる。

而して彼の故郷は過去の標識にして、千回萬轉思つて過去に至れば、遂に故郷に歸著せずんば休まざるなり。身世遭遇幾多の快樂ありしか幾多の苦痛ありしか、又幾百の戦争を経たりしか。すべて是等の事を回想し來らば、歸著する所は故郷に在るなり。老杜の所謂「魂招不來歸故郷」とはこの事

標識

杜^{*}甫

なり。

一〇 故郷 (二)

故郷は即ち過去の記憶と聯想とを以て建立したる神聖なる殿堂なり。東流の水の海に注ぐが如く、人の想念はこの殿堂に向つて注ぐなり。英國の詞宗バイロンの如き、郷國に容れられず、憤慨の餘郷國に向つて最後の告別をなして曰く「余は巖根より漂ひたる葦の如し。波瀾の湧く所、風濤の呼吸する所、泛々として行く所に任すべし」と。然れども彼また曰く「余は異郷の灰となるも、魂はなほ故郷を愛するなり」と。
 彼の故郷と交を絶ちたるバイロンにして此の如し。これ

詞宗

諸葛亮前出
 師表に臣布
 衣躬耕於
 南陽云々

漢書高帝紀

を思へば、かの大人、君子、英雄、豪傑が故郷に戀々たるも亦決して怪しとするに足らず。風雲の氣、兒女の情、豈必ずしも相衝突するものならんや。否、彼等は最も多血多涙の熱腸あるにあらずや。身を先帝に致し、五丈原頭師を出すの日も、尙南陽の舊草廬を忘るゝ能はざるにあらずや。

語に曰く「遊子故郷を悲しむ」と。悲しむは愛するの至なり。彼は何が故に悲しむか、遊子なるを以てなり。故郷に遠ざからざれば故郷の楽しきを覚えざるなり。彼の田夫野人、足、郷里の外に出でざるものは、故郷の愛すべきを覚えざるなり。若し彼等にして一度伊勢參宮を爲さば、その晝は、見るもの聞くもの珍奇の感をなし、更に望郷の情を發せざるも、旅店

英國の國歌

人靜まる後、孤燈漸く滅し、四隣寂々たる時に於て、心は故郷に歸りて、夢は既に綠秧深き處、耦耕を爲し居るなり。

知るべし、最も故國を愛するの情に富みたる者は、萬里遠征、到る處植民を作す所の英人にあらざれば、支那人なるを看よ。飄然家を棄て、唯利これ圖る英人も、一たびルー・ルブリッタニアの歌を聽けば、催眠術を施されたるが如く、悚然として佇立するにあらずや。支那人の如きは最も出稼を爲す人民にして、最も故郷を愛する人民なり。彼等は出稼す、然れどもその獲たる金を携へて遂に故郷に歸るなり。

蓋し家を愛するの念と故郷を愛するの念とは、皆その本を一にする者なり。而して雜慮のこれに沁入せざる時に於

浙江省寧波府の地

ては、明星の如く、精金の如く、水晶の如く、人の想念中において、最も粹、最も美、最も靈、最も高なるものなり。阿倍仲麿將に唐より歸らんとし、明州*において月の海上より出づるを見て、歌うて曰く、

天の原ふりさけみれば春日なる

三笠の山に出でし月かも。

一唱三嘆

千秋の下、一唱三嘆、人をして凄然たらしむ。これ豈能因法師者流のよくする所ならんや。故郷は一種のインスピレーションなり。琴線一たびこれに觸るれば無限の妙音を發す。

練習

一、左の語句を解釋せよ。

五丈原頭師を出すの日尙南陽の舊廬を忘るゝ能はず

(徳富蘇峯)

一木一草の微と雖も尙千絲萬縷の情濃かなり

客觀的 主觀的 聯想 理想

二、勃々 泛々 を含める二つの短文を作れ。

一一 鴻門之會

項羽率諸侯兵欲西入關。或說沛公守關門。羽至門閉。大怒。攻破之。進至戲。期旦擊沛公。羽兵四十萬。號百萬。在鴻門。沛公兵十萬。在霸上。范增說羽曰。沛公居山東。貪財好色。今入關。財物無所取。婦女無所幸。此其志不在小。吾令人望其氣。皆爲龍成。五采。此天子氣也。急擊勿失。

羽季父項伯素善張良。夜馳至沛公軍。告急呼與俱去。良曰。臣從沛公。有急亡不義。入具告。因要伯入見沛公。奉卮酒爲壽。約爲

婚姻。曰。吾入關。秋毫不敢有所近。籍吏民。封府庫。而待將軍。所以守關者。備他盜也。願伯具言臣之不敢倍德。伯許諾。曰。且日不可不蚤自來謝。伯去具以告羽。且曰。人有大功。擊之不義。不如因善遇之。

沛公旦從百餘騎。見羽鴻門。謝曰。臣與將軍戮力而攻秦。將軍戰河北。臣戰河南。不自意先入關破秦。得復見將軍於此。今者有小人之言。令將軍與臣有隙。羽曰。此沛公左司馬曹無傷之言。羽留沛公與飲。范增數目羽。舉所佩玉玦者三。羽不應。增出使項莊入。前爲壽。請以劍舞。因擊沛公。項伯亦拔劍起舞。常以身翼蔽沛公。莊不得擊。張良出告樊噲。以事急。噲擁盾直入。瞋目視羽。頭髮上指。目眦盡張。羽曰。壯士。賜之卮酒。則與斗卮酒。賜之彘肩。則生

彘肩。噲立飲、拔劍切肉啗之。羽曰、能復飲乎。噲曰、臣死且不避、卮酒安足辭。沛公先破秦入咸陽、勞苦而功高、未有封爵之賞、而將軍聽細人之說、欲誅有功之人、此亡秦之續耳。切爲將軍不取也。羽曰、坐。噲從良坐。

須臾沛公起如廁、因招噲出、閒行趨霸上。留良謝羽曰、沛公不勝杯勺、不能辭、使臣良奉白璧一雙、再拜獻將軍足下、玉斗一雙、再拜奉亞父足下。羽曰、沛公安在。良曰、聞將軍有意督過之、脫身獨去、已至軍矣。亞父拔劍撞玉斗而破之曰、唉、豎子不足謀。奪將軍天下者、必沛公也。沛公至軍、立誅曹無傷、居數日、羽引兵西屠咸陽、殺降王子嬰、燒秦宮室、火三月不絕。掘始皇冢、收寶貨婦女、而東。秦民大失望。 (十八史略)

一二 小品三篇

一 月と露

よろづの事は、月見るにこそ慰むものなれ。ある人の「月ばかりおもしろきものはあらじ」といひしに、またひとり「露こそあはれなれ」と争ひしこそをかしけれ。折に觸れば、何かはあはれならざらん。月花は更なり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎けて清く流るゝ水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。沅湘日夜東に流れ去る、愁人のためにとどまる事しばらくもせずといへる詩を見しこそあはれなりしか。嵇康も山澤に遊びて魚鳥を見れば、心樂むといへり。人遠く

應橋花開風
葉衰出門
何處望三京
師、沅湘一
夜東流去、
不爲愁
人住少時、
(唐戴叔倫)
西晉の人、
竹林七賢の

水草清き所に、さまよひありきたるばかり、心慰む事はあ
らじ。(徒然草)

二 青き眼

さしたる事なくて人のがり行くは、よからぬ事なり。用あ
りて行きたりとも、その事果てなばとく歸るべし。久しく居
たるいとむづかし。人と對ひたれば、詞も多く身もくたびれ、
心も靜ならず、よろづの事障りて時を移す。互の爲益なし。い
とはしげにいはんもわろし。心づきなき事あらん折は、なか
なかその由をもいひてん。同じ心に對はまほしく思はん人
の、つれづれにて、今しばし今日は心靜になどいはんは、この
限にはあらざるべし。阮籍が青き眼たれもあるべき事なり。

阮籍…不
拘禮敬能
爲青白眼
對人
(晋書)

その事となきに、人のきたりて、のどかに物語して歸りぬる
いとよし。又、文も久しく聞えさせねばなどばかり、いひおこ
せたるいと嬉し。(徒然草)

三 過ぎにし方

靜におもへば、よろづ過ぎにし方の戀ひしさのみぞせん
方なき。人しづまりて後、長き夜のすさびに何となき具足取
りしたゝめ、のこし置かじとおもふ反語などやり棄つる中
に、なき人の手習ひ繪かきすさびたる見出でたるこそ、ただ
そのをりの心地こそすれ。この頃ある人の文だに、久しくな
りて、いかなるをり、いつの年なりけんと思ふは、あはれなる
ぞかし。(徒然草)

具足

練習

- 一、次の語の解釋をなせ。
人のがり　すさび　つれづれ　なか／＼に
- 二、「あらずとあらじ」「けん」とでん　の區別を問ふ。
- 三、「こそ」を含める短文を作れ。

一三 照會披露

一 信用を問合す

お啓　是、お察榮幸大段御相立致神戶榮町
の奥田若とら出地小支店お設け小付同支店
より取引開始御儀弊店へ或談も之由交弊店
ふては該高貴此性質と多くお案内の御免話言

の決答躊躇致し居次第も御先方よりの書面
ふよれを從來文しく貴店とら取引の御儀
采りて就らば中迄までもなく確実なる御
とら存外へども當為念取引の控極等御細
由内取下さる御儀は御幸玉の玉りに御先方
御取まで　草々御白

二、送品の品質につき照會

お啓　本月五日付を以てお送品の美術小物
十五種御取下さる御儀は御幸玉の玉りに御先方

一 錦口錦及び二錦の品を右田同様に品を
 之小や下見致し小変にて毛大分粗製の振小見
 更けられ申儀右は何の此等遠まては世と之儀や
 或は劣品を以て一時代用の衣類なるにやは事
 如の通り目下季衣小なるを遂り此れ一とも信用上
 同品品として其變を致通小付あり母との要品小
 刻しお場の要大至急此回報を致し分此此出照
 言申上げ 旬

二 白染店は代便の少な産なるより七寧し此度
 に於て貯蓄を保ちむと存し右物系の要も可
 然此合みおき下され度切望致儀

三 開店の披露

拆啓 愈々御清栄を蒙賀儀陳女小生儀これ
 まで久しく日本毛布株式会社支配人として勤
 致し居小変と般同社及び二三辱此援助小より
 き記の要小て毛織物一切此卸小賣店獨立此業
 致し小付ては何卒舊小信し此立を蒙り度
 偏小幸致し儀販賣の品目此記此通り内地製

造不は勿論政米各玉の毛後物ふる之何事も最
 新最優の品を吟味即精三層價ふお働きり中
 百多少ふ不拘由命仰せ付けられ安市内を由一非
 次第正札附又本お携へ由ちよ由何あ甲ゆ当
 とき附屬裁縫部も昇業はり浮張和後裁縫
 一切抱込て運送よ由命お伺ひあ甲ゆ府何卒
 此眷顧を福はり交史も昇店此由披露まで如
 此に由在候 敬々

一四 人臣の道

およそ王土に生れて、忠をいたし命をすつるは人臣の道
 なり。必ず之を身の高名と思ふべきにあらず。然れども後の
 人を勵まし、その迹を憫びて賞せらるゝは君の御政なり。下
 としてきほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる
 功なくして過分の望をいたすこと、みづから危むるはしな
 れど、前車の轍を見る事は、誠にありがたき習なりけんかし。
 中古までも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強に
 なりぬれば必ず驕る心あり。果して身を滅し家を失ふため
 しなれば、戒められしもことわりなり。鳥羽院の御代にや、諸
 國の武士の源平の家に屬する事をとどむべし」といふ制符
 たびくありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事あ

*説苑に「前
 車覆後車
 戒」。

る時は宣旨を賜はりて諸國の兵を召し具しけるに、近代となりて、やがてかたらはるゝ輩多くなりしによりて、この制符は下されしなり。果して今までの亂世の基なれば、いひがひなき事になりけり。

この頃より、一度軍にかけあひ、或は家子郎等節に死ぬるたぐひもあれば、わが功におきては日本國を賜へ、もしは半國を賜はりても足るべからず、など申すめり。誠にさまざま思ふ事はあらじなれど、やがてこれより亂るゝはしともなり、又朝家のかるがるしさもおし量らるゝものなり。言行は君子の樞機なり」といへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬ事にこそ。堅き氷は、霜を履むより至

言行者君子
之樞機、樞
機之發、榮
辱之主也、
言行君子
所以動天
地也、可
不、慎乎、
(易)
履霜堅冰
至(易)

箕山の隱者

清國河内省

るならひなれば、亂臣賊子といふものは、そのはじめ心詞を慎まざるより出てくるなり。世の中の衰ふと申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改まるにもあらず。人の心の悪しくなり行くを末世とはいへるにや。昔、許由といふ人は、帝堯の國を傳へんとありしを聞いて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞いて、この水をだにきたながりて渡らざりき。その人五臟六腑のかはるにはあらず。能く思ひならはせる故にこそあらめ。

なほ行末の人の心、思ひやるこそあさましけれ。大かた、おのれ一身は恩に誇るとも、萬人の怨を遺すべき事をばなどか顧みざらん。君は萬姓の主にてましませば、限りある地を

もちて限りなき人に頒たせ給はん事は、推しても測り奉るべし。もし一國宛を望まば、六十六人にて皆塞がりなん。一郡宛といふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悦ぶとも、千萬の人はよろこばじ。況んや日本の半ばを心ざし、皆ながら望まば、帝王はいづくをしらせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、言葉にもいだし、面にも羞づる色のなきを謀反のはじめとはいふべきなり。將門は比叡山に登り、大内を遠見して、謀反を思ひ企てけるも、かゝる類にやありけん。昔は人の正しくて、將門に見も懲り聞きも懲りけんを、今は人々の心かくのみなり。にたれば、この世はいよゝゝ衰へぬるにや。

劉邦

漢の高祖の天下を取りしは、蕭何、張良、韓信が力なり。これを三傑といふ。萬人に勝れたるを傑といふとぞ。中にも張良は高祖の師として「籌を帷幄の中にめぐらして、勝つことを千里の外に決するはこの人なり」と宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留といひてすこしきなる所を望みて封せられにけり。あらゆる功臣多くほろびしかど、張良は身を全うしたりき。

同五年七月
藤原泰衡を
征す

近き代の事ぞかし、頼朝の時までも、文治の頃にや奥の泰衡を追討せしに、みづから向ふことありしに、平重忠が先陣にてその功勝れたりければ、五十四郡の中いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、極めたるすくなき所を望み賜

熊谷直實

藤原親房卿
の像



はりけりとぞ。之は人にひろく
賞をも行はしめんがためにや、
かしかかりけるをのこにこそ。
又、直實といひける者に一所
を與へ給ふ下文に「日本第一の
剛の者なり」と書きて賜ひてけ
り。一とせかの下文をもちて奏
聞する人のありけるが「褒美の
詞の甚だしきに與へし所のす
くなきまことに名を重くして
利を軽くしけるいみじきこと」

と口々に譽めあへりけり。いかに心得て譽めけんといとを
かし。これまでの心こそなからめ、事に觸れて君をおとし奉
り、身を高くする輩のみおほくなれり。ありし世の東國の風
儀もかはりはてぬ。公家のふるき姿もなし。いかになりぬる
世にかと歎くともがらもありと聞えき。(北畠親房 神皇正統記)

【練習】次の語句の意義を問ふ。

籌を帷幄の中にめぐらし勝つ事を千里の外に決す。

堅き氷は霜を履むより至るならひなり。

制符 宣旨 家の子 郎等 公家

一五 楠氏論

外史氏曰、余數往來攝播間、訪所謂櫻井驛者、得之山崎路。一

小村耳。過者或不省其爲驛址。蓋經足利織豐數氏世故變移。道里驛程。從輒改耳。余於是低回不能去。願望金剛山巔。立雲際。想見公舉義之秋。及其子孫據以扞護王室也。觀公詣行在對天子。曰。臣而未死。賊不患不滅。夫以一兵衛尉。而居然以天下之重任。豈非感激值遇。以身許國哉。故能以赤手障江河。回天日於既墜。何其壯也。公聚北條氏精銳於一城之下。而使新田足利之屬。擣其空虛。以殪其渠魁。帝之復辟。醜爵任職。宜以公爲首。而纔能與結城名和輩比肩。其失於舉措。足以知中興之無成矣。及足利氏叛朝廷。方倚新田氏爲重。公特充禰禰供其驅使。亦以其門地有不若焉爾。然京師大捷。殆致掃殄者。非因公之策耶。嚮使帝以其所任新田氏者。以任於公乎。曷至使犬羊狐鼠之賊。蹂踐吾朝。

復辟

禰禰

廷哉。然觀其臨死戒子。又曰。吾死。天下悉歸足利氏。夫知天下之不可爲。而猶留其子孫。以衛天子。其設心雖古。大臣何以遠過。故



子孫能守其遺訓。護正統天子於彈丸黑子之地。以防四海寇賊者。及三朝五十餘年之久。舉一門之肝腦。而竭諸國家之難。至其澌盡灰滅。而後足利氏始得大成。其志於天下。蓋朝廷不能大任楠氏。而楠氏

資望

楠氏論

六七

揆其實亦與當時之見等耳。不有楠氏雖有三器將安託焉以繫四方望哉。笠置夢兆於是益驗而南風不競俱傷共亡終古莫以恤其勞悲夫。抑正閏雖殊卒歸於一能熙鴻號於無窮使公有知亦可以暝矣。而其大節巍然與山河竝存足以維持世道人心於萬古之下。比之姦雄迭起僅傳數百年者其得失果何如哉。

(賴 襄)

一六 海と日本文學 (二)

我が邦は四圍みな海にして繁華殷富なる都市は海岸線に多く随つて人口もまた古來海岸線において稠密なりしこと疑ふべからず。されば邦人はおのづから海と相離るべからざる直接間接の關係を有すること少からず。随つて我が文學も亦おのづから海と少からざる關係を有すべき理なり。

例へば潮來り汐去る面白さを詠じたる歌、または晴れたる日の親む可く、風たてる日の怖るべき海原のさまを記せし文、或は又浪のはてより上る日の美しき、島山のあなたに傾き落つる日のあはれさなどを寫し、もの、勇ましき舟子が上を傳へたる小説などは、我が文學に多く見ゆべき筈ならずや。

然るに事實はこれに反せり。和歌には海に關するもの甚だ少し。偶、これなきにあらずと雖も、多くは海を怖れ、海を厭へるが如き思想を有するものにして、海國民の歌としては、

敕撰

ふさはしからぬものとやいはん。まことに悲しげなるもののみなり。試に古今集以後の敕撰の歌集、又は一家の歌集の類を手にして、漁夫・舟人の類を詠じたる歌をあらため見よ。その世わたりの危きを悲み憐む意の痕を留めざるもの幾干かある。萬里の海を我が路として、八方の風を驅逐する舟人の意氣を詠じたる和歌、又は千尋の波の底より吞舟の大魚を獲て、鉉頭に獨り嘯く漁夫の感興を描ける章の如き幾干かある。和歌衰へて後の俳諧・發句は、新しき酒を盛れる小さき囊なり。されどこの囊の中にも、海に對する人の心を勵まし勇ましむるに足りぬべき好き酒の盛られたる事は幾度もあらずして、却つて折角の新しき囊に、平安朝以來の海

を怖るゝ古き思想の、譬へば腐りたる酒の如きものゝ盛られたること少からぬやう見ゆ。

小説は源氏物語・宇津保物語のむかしより、海とさへいへば怖るべきものゝやう描けるが多し。風に遇ひて船の破るること、又は思はぬかたに吹流さるゝことなどは、古來の小説家の好みて描けるところなるが、その物語は大抵机上にて、作者が海に對する自己の恐怖心より捻り出したる曖昧無實のものたるに過ぎず。一も眞實らしき状態を描きて、海上の光景を讀者に感知せしむるもの無し。

さればそれ等の物語は、徒にその讀者をして海の怖るべきことを空想上に深く思ひ浸ましむるほかには、何の結果

をも遺すことなし。古來の小説少からずと雖も、海員の生活、船上の旅客の眞情等を書き現はしゝものゝ如きは幾千かあらん。予は實に或一章にすら、海に關する記事の、やゝ囑目に値すべきものを含める小説の名を指示する能はざるを悲しむ。謠曲・淨瑠璃も亦然り。作者が海に對する恐怖心の外には、海に關する記事中に於て見出し得べきもの無しといふも不可なきに似たり。若し強ひてその外に何物をか尋ね得たらんには、それは海神・龍王等に對する迷信ならんのみ。

かくのごとく我が邦と海との地理上の關係に、文學の相應せざること甚だしけれども、之に依つて、直ちに我が邦の歌人・俳諧師・小説家、謠曲・淨瑠璃の作者等を「思想偏僻なり、眼界狹小なり、伎倆拙悪なり」と爲さんは、餘りに酷烈にして、雅量に乏しき判斷となさざるべからず。如何となれば、文學はその地理に相應して發達・繁榮すべきものなるのみならず、また實にその歴史に相應して發達・繁榮するものなればなり。されば我が邦と海との地理上の關係を考察するが如く、我が邦と海との歴史上の關係をも亦考察せずんば、我が邦の文學を論ずるに於て、その判斷の中正を得ざるべきはいふまでもなし。

一七 海と日本文學 (二)

然らば我が邦と海との歴史上の關係は如何。徳川氏は大

驛傳

船を造ることを禁じ、海外諸國と交通することを欲せざりき。陸上の交通、驛傳の諸法は甚だ整理せられたるに拘らず、海上の交通、舟運の利は甚だ輕視せられて、膽勇ある豪商等の經營のほかには、政府も士人も殆ど指を海事に染めず。諸侯の參觀交替の如きも、皆必ず陸路を取りしが如きは、最近三百年の歴史なり。

參觀交替

舟子は志州の鳥羽より豆州の下田に至る航路を以て非常の難關と思惟し、旅客は中國諸港より讚州多度津に至る短距離の航海を以て大冒險の如く恐怖し、一般の人民は大罪人と舟子とのほかは海に航すべきにあらずと考へ、婦女子は海を以て龍神、海坊主、船幽靈等の巢窟と信じたりしは、

後漢の費長房の故事

徳川氏が我が邦民をして壺中に遊樂せしめし政治の結果なり。かくの如き歴史上の状態に依りて考察する時は、我が邦の文學と海との關係は、地理上には相應せざるも、實に能く歴史上には相應吻合せりといふべし。

また徳川氏以前に於ては、足利氏が京都に據りたる、桓武天皇が山城の山間に都を定め給ひたる、猶その以前に至りても、大和の地に都の定められたる等は、著しく我が邦の文學をして海と相遠ざからしめたり。特に元祿以前の文學は、國民の文學といはんよりは寧ろ貴族の文學といふべきものなれば、その國都の海邊を離れし山間に置かるゝに至りしは、都府の住者たる貴族をして海に遠ざからしめ、随つて

又我が邦の文學をして、海に遠ざかるに至らしめし大原因なりといふべし、

かくの如くにして奈良・京都の文學者、即ち我が邦の文學の父たり母たる位置に立てる文學者よりして、海といへば須磨・明石、若しくは紀州の濱の外は知らぬが如き知識・感想を相承せしを以て、その兒孫たる文學者の、今に至るまで、海に關する篇什の何一つ我が邦文學史を飾るに足るべきものを、出さざるも、敢へて怪むに足らずとやいはん。

都の大和に在りし間、遣唐使の存せしは、萬葉集をして聊か古今集よりも海に關する歌の包含を多からしめたり。古今集を讀み終つて、溯つて萬葉集を讀まば、その集の作者等



載籍

太ノ安歴古
事記を撰ぶ
の圖
右ノ上
舍人
親王像

が、かの集の作者等よりも海に親しかりし事は、何人と雖もこれを認め得ん。これ亦海に對しては我が文學が我が歴史に相應せるの一證なり。萬葉集以前は載籍甚だ乏しければ、吾人をして精細確實なる斷案を下す能はざらしむれども、古今集を抛つて萬葉

集に就けるが如くに、萬葉集を讀み終つて古事記・日本紀等に見えたる傳説・歌謠を見る時は、吾人は海國民としてこゝに一種の愉快を感じ、我が邦上古の文學は、歴史上にも地理上にも能く相吻合して、我が祖先等が海に對する思想感情及び知識の決して萎縮的ならざりしことを知る。實に記・紀には海ならびに船に關する記事等の多きこと、平安朝以來の書史には決してその比を見る能はざる程なるが、これ明かに我が本來の日本人、即ち歴史的の繫縛を被らざりし時代の邦人が、後世の邦人の海に對して畏怖心をのみ抱くが如くならざりしことを證するにあらずや。

我が邦の地理上の状態は、我が邦の文學をして海に親ま

しむべき因をなせり。しかるに歴史上の状態は、上世を除きては、我が邦の文學をして海に遠ざからしむべき因を爲ししこと上述の如し。かくの如くにして我が邦の文學は、海國の文學としては甚だ相應せざる情態を有するに至れり。然れども、これ實に歴史上の關係の壓迫に因れること上述の如くにして、邦人本來の性質は海洋に對して怯懦なるにあらず。又古來の歌客・文人の思想の偏僻、眼界の狹小、伎倆の拙劣なるのみよりしてかくの如きに至れりと爲すべからざるは、歴史の繫縛を被らざりし時代の人の手に成れる記・紀の中に、如何ばかり海に關する記事の多きかに照して極めて明かなりとす。

海中に國を成せる邦人に吞海の氣象無くんば、如何ぞ世界に雄を稱するを得ん。地理上の状態は千古渝らず。歴史上の状態は雲煙來去す。今や我が邦は、山間の狭き平地に安きを偷みしが如き昔時の愚をばふたたびせず、又國を鎖し、海を封ぜし近古の陋をばふたたびせず、膽勇ある邦人は島内にのみ安居するに堪へず、海に親しむ事は日に月に多く成りゆくなり。海國の所産たるに相應する文學は蓋し今日以後に成らん。(譯言 幸田露伴)

練習 次の語句を解釋せよ。

- 直接 間接 空想 載籍 雅量 迷信
- 參觀交替 壺中の天地 吞海の氣象

一八 雜說

上

龍嘘氣成雲。雲固弗靈於龍也。然龍乘是氣、茫洋窮乎玄閭、薄日月、伏光景、感震電、神變化、水下土、汨陵谷。雲亦靈怪矣哉。雲龍之所能使爲靈也。若龍之靈、則非雲之所能使爲靈也。然龍弗得雲、無以神其靈矣。失其所憑依、信不可歟。異哉、其所憑依、乃其所自爲也。易曰：雲從龍。旣曰龍、雲從之矣。(韓退之 文章軌範)

下

世有伯樂、然後有千里馬。千里馬常有、而伯樂不常有。故雖有名馬、祇辱於奴隸人之手、駢死於槽櫪之間、不以千里稱也。馬之千里者、一食或盡粟一石。食馬者、不知其能千里而食也。是馬也、

雖有千里之能、食不飽、力不足。才美不外見、且欲與常馬等、不可得。安求其能千里也。策之不以其道、食之不能盡其材、鳴之不能通其意、執策而臨之曰、天下無良馬、嗚呼、其真無馬耶。其真不識馬耶。

(韓退之 文章紀範)

一九 故事熟語

- 措大 木鐸 二豎 刀圭 杏林 國手
- 月旦 私淑 綠林 乙夜 竹帛 同人
- 逕庭 他山之石 中原之鹿 馬耳東風
- 朝三暮四 尸衣素餐 空中樓閣

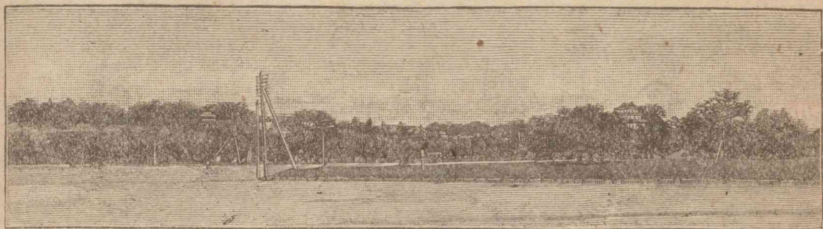
二〇 諒闇

黒布添へたる國旗は家毎に翻りて、貴きも賤しきも袖に胸に黒き喪章を附く。樂の音はふつと聞えず。朝なくの新聞紙に、世におはせし時の御事ども書列ねたる、涙のみ先だちて誰かは讀みあへん。諒闇といふこと書の上にくそ學び知りしか。今のうつゝに見んとは思ひかけきや。

四十六年の大御代の間に、我が國の開けゆく跡のいちじるしかりしこと、外國の人々もひたすらに神業とのみ稱へ合へり。古の文明の盛なりし印度は早く英吉利の勢の下に屈し、四千年の古國にて四億の民を有てりといふ支那帝國も、鴉片の夢より醒めがてにせし頃、誰かは東洋の一島帝國

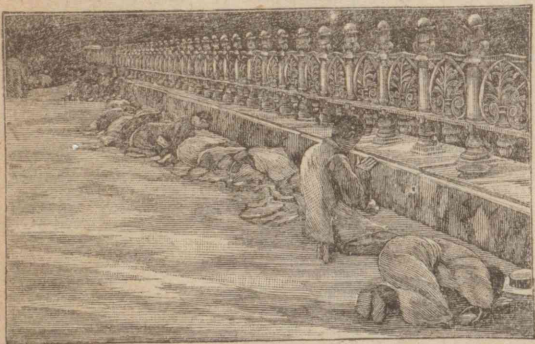
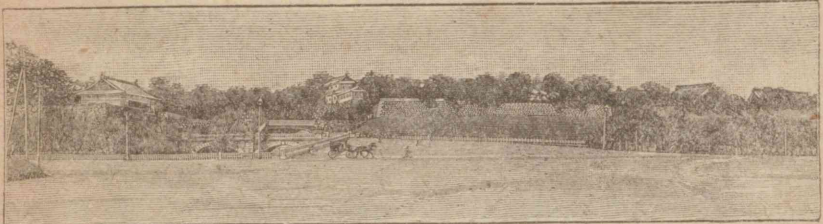
諒闇

(一) 西紀一八五七年英國印度を領す
(二) 清宣宗帝道光二十年鴉片戰爭起り二十二年償金を出して英と和す



に、古今の聖主の生れいでまさんとはおもひ
 料るべき。さて上る朝日の光に國の内の黒雲
 ことごとになびけ給ひて、御稜威の光は年と
 ともに外國にも輝かぬくまなく、世界はすべ
 て我が物と思ひ上りシアリアン人等の眼を
 みはりて驚きあきれしこそうれしかりしか。
 七百年來武家の手に渡りし大政を、古さま
 に復し給ひしはいふに及ばず。教育を進めさ
 せ、兵制を定めさせ、東洋にかつて例なき立憲
 の制度をさへ建て給ひて、古のふるきを棄て
 ず、今の新しきを採り、常に國を強くし、民を富

*老いぬれば
 同じことこ
 そせられけ
 れ君は千代
 ませ君は千
 代ませ
 (拾遺集)

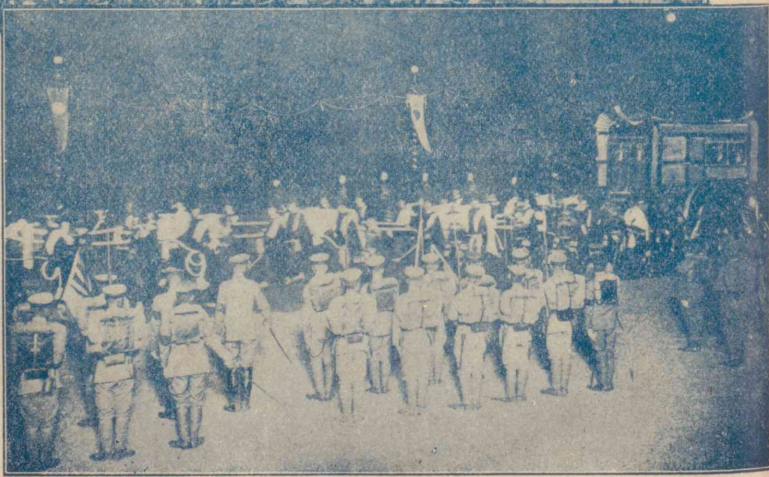
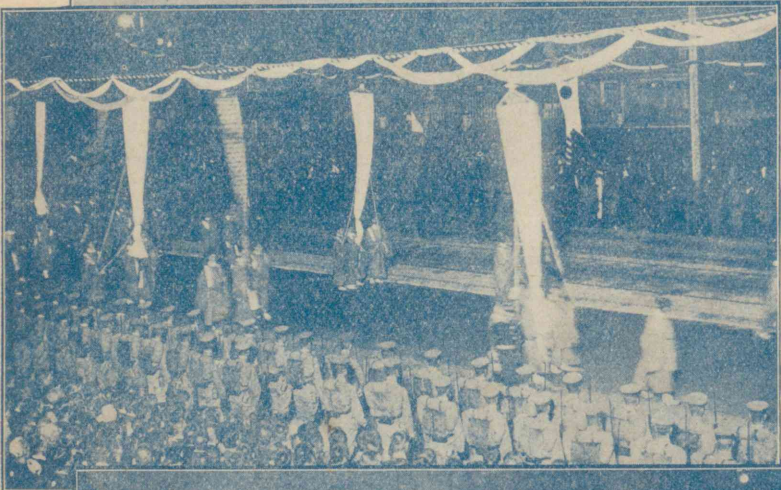
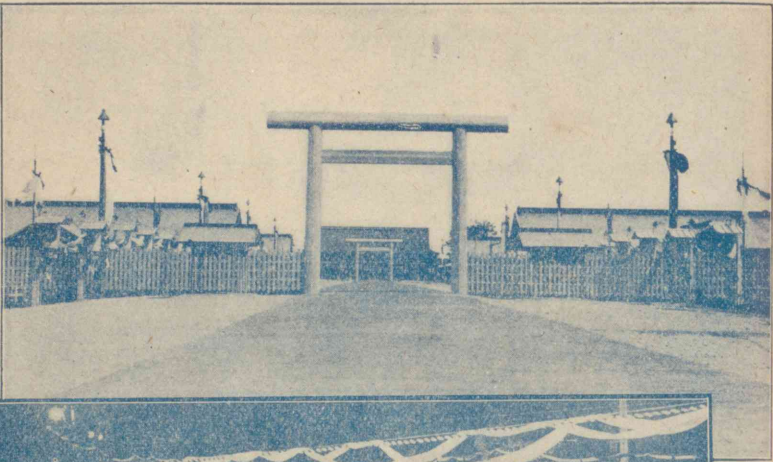


ませんの大御心に、冬のふりこほり、夏のてり
 はたゞくにも、一日も大御政を怠らせ給はざ
 りし御盛徳、御大業。東西古今の帝王多くまし
 ませども誰かは比べ奉るべき。

君は千代ませ八千代ませ
 と歌ひつれたる國民は、即位
 五十年の祝典を擧げ奉らん
 とこそ待渡りつれ。明治四十
 五年七月二十日、御大患の報
 一たび傳はりて、全國六千萬
 の國民は皆色を失ひぬ。都に

住む者は、二重橋の前にぬかづきて御平癒を祈り奉り、鄙にあるものも、祈らぬ神もなく立てぬ願も無かりき。あはれ、國民の眞心もその甲斐なく、三十日といふに神去り給ひしかば、六千萬の國民は唯闇行く心地ぞしける。

諒闇のさびしき月日も、十日二十日と夢の中に過ぎて、九月十三日といふに東京青山にて大喪儀行はせ給ふ。英吉利皇帝の御名代をはじめ、獨逸皇帝、西班牙皇帝よりも御名代の宮をおこせ給ひ、佛國、米國、露國、其の他の國々皆ことさらに大使おうせて御盛儀に列らしめぬ。かばかりの御盛儀は古の書にも無き事なれば、悲しき中にも皇國の御榮をおもふ心の誇あるにつけても、かつは大君をしのびいて、今更



に袂をしぼらぬ人もなしや。(芳賀矢二)

練習 左の語句を口語に改めよ。

眼をみはりて驚きあされしこそうれしかりしか
かつは大君をしのびいてて今更に袂をしぼらぬ人もなしや
今のうつゝに見んとは思ひかけさや

二一 明治天皇大葬儀ノ詠詞

幽翳 靈輜
内閣總理大臣正二位勳一等侯爵西園寺公望泣血頓首謹
ミテ言ス靈輜殯ヲ啓カセラレ饋奠方ニ陳ス群臣咸集リ友
邦畢ク會シ等シク聖儀ノ幽翳ヲ痛ミ奉ル恭シク惟ミルニ
明治天皇叡智神ノ如ク峻徳天ニ侔シ冲齡極ニ登リ武ヲ神
皇ノ肇基ニ踵ギタマヒ國歩ノ艱難ヲ排シテ維新ノ大業ヲ

倦眷

丕運

不豫

成シ五條ノ誓文ヲ立テ、百代ノ國是ヲ定メタマヒ藩ヲ廢
 シ縣ヲ置キ制ヲ革メ治ヲ興シ内ハ憲法ヲ規定シテ軌範ヲ
 不朽ニ垂レ外ハ條約ヲ改訂シテ利權ヲ永遠ニ伸ベタマヒ
 法典ヲ修メ産業ヲ獎メ兵備爰ニ整ヒ文教益振フ常ニ世界
 ノ平和ニ倦眷シタマヒ殊ニ東洋ノ治安ヲ軫念アラセラレ
 同盟ヲ締ビ鄰交ヲ敦クシ丕運蔚乎トシテ我が武維レ揚リ
 皇猷淵大ニシテ國威愈宣ブ盛徳洪業寔ニ前古ヲ曠シクシ
 テ後代ヲ光ラス伏シテ顧ミレバ御宇四十七年ノ開天行至
 健ニシテ一日萬機未ダ曾テ逸豫シタマハズ庶政咸舉リ蒼
 生永ク頼リ均シク昭代ノ慶福ヲ享ケ舉リテ萬壽ノ無疆ヲ
 祝セシニ一朝不豫アラセラレ率土震駭シ天ヲ仰ギ地ニ躡

登遐

シ神トシテ禱ラザルナシ吁嗟蒼タル者ハ皇穹胡寧ゾ弔マ
 ザル大駕奄チ登遐シテ永ク兆民ヲ棄テタマヒ靈柩咫尺ニ
 在マシテ御容長ヘニ人天ヲ隔ツ龍髯ノ攀ヅルニ路ナキヲ
 悲シミ鳥號ノ尋ヌルニ地ナキヲ傷ム情塞リ神逼リ復言フ
 所ヲ知ラズ伏シテ冀クハ在天ノ聖靈其レ臣等哀々ノ微忱
 ヲ愍ミ偏ニ照鑒ヲ垂レサセタマヘ臣公望茲ニ百僚臣民ニ
 代リテ泣血頓首謹ミテ言ス

二二 死と永生

死は生きとし生けるものゝ免るべからざる運命なり。そ
 れ唯免るべからざる運命なり故に又避くべからざる問題

なり。されど生を惜む人はあれども死を惜む人は少く、生について慮る人はあれども死について考ふる人は稀なり。訝かしからずや。

如何にして生くべきか、これ人生の大いなる疑問なり。然れども如何にして死すべきかは、更に大いなる疑問にはあらざるか。われらは歴史を讀みて大いなる宗教のをこるを見たり。されど、宗教とは生きんがための教にあらずして、死せんが爲の悟なり。釋迦は人生の四^{*}苦に感じて解脱の途を説きぬ。耶蘇は同胞の宿罪を贖うて永世の道を開きぬ。解脱や永生や、死を外にして何の意義かある。最も賢き人の説ける哲學の旨趣も亦これに外ならざるなり。

生老病死
解脱

安心立命

天地人生の理法を明かにするは、人をして安心立命の地を得しむるにあり。安心立命とは、所詮は死を安からしむるの謂にあらずや。道德は現世の爲にのみ存するものにあらず。名譽の不朽を思ひ、事業の永遠を言ふは、これ即ち死後の世界を言ふなり。あはれ、其の生を見て其の死を見ざる者は、人生の根本を遺れたるなり。死は凡ての物の終りにして、又凡ての用の初めなればなり。されば人々死を考へよ。死を考ふるは即ち人生の目的を考ふるなり。如何にして生くべきかの問題は、即ち如何にして死すべきかの問題なり。死を考ふるは、死滅を考ふるにあらずして、永生を考ふるなり。死は人生の究竟なるが故に、永生は人生の目的なり。夫

の生死の優劣を争ひ、人生の價値を疑ふものは愚なるかな。われらは生を知る、未だ死を知らず、如何ぞ其の優劣を知らんや。人生の價値は絶對的なり、他に比すべき者なし。厭世といひ樂天と謂ふ、われらはその何の意なるかを知らず。われらは唯人生の實在せるを知るのみ。

さればわれらは生きざるべからず、永遠に生きざるべからず。死は萬物の運命なり。されどわれらは死を超絶して其の永生を續けざるべからず。如何にせば死して生くるを得んか。人生究竟の問題こゝに集まる。

涅槃

世に神に禱りて永生を求むるものあり、佛に願ひて涅槃の寂寞をもとむるものあり。されど形體を離れて魂魄なき

を如何にすべき。また其の墳墓を壮大にし、金を鏤め石に刻して、名の後世に傳はらんことを求むるものあり。されど時は凡ての物の破壊者なり。風雨幾歳、時移り人渝り、桑滄幾度か變轉して墓標獨り全きを得んや。否や。かくの如きは永生の道にあらざるなり。

まことの永生は名によりて生くるにあらずして、事によりて生くるなり。儒教の存するところ、今なほ孔子あらざるはなく、佛寺の建つところ、到る處に釋迦あり。耶蘇は十字架にかゝれりと雖も、今なほ基督教徒の命なり。楠公の史蹟に感激する者の胸には楠公其の人の生命あり。蒸氣機關の動くところにはワットの血液あり。電氣の線のかゝるところ

蕩々泪々

は即ちフランクリンが永生の地にあらずや。

まことの永生は時と與に深きを加へ、人と共に廣さを加ふ。されば一人の精神は千萬人の生命となり、河より海に、海より陸に、蕩々泪々として遂に世界を動かさずんば已まざるべし。十九世紀の文明は、かくの如き幾多永生の結果に外ならざるなり。

我が少年諸子よ。諸子は曾て死を考へしことありや。其の年の弱きを以て早しとなすなかれ、死を思はずして生きてゐるは空しく生くるなり。其の死をして恨なからしめんと欲せずして、獨り其の生の完からんを望むは、これ目的なくして道を歩むなり。死を懷ふは即ち永生を懷ふなり。而して最

もよくこの問題を解釋したるものは哲人傑士なり。

(高山林次郎 樗牛全集)

二三 郭橐駝傳

郭橐駝、不知始何名。病僂、隆然伏行。有類橐駝者。故鄉人號之。駝聞之曰、甚善。名我固當。因捨其名、亦自謂橐駝云。其鄉曰豐樂鄉、在長安西。駝業種樹。凡長安豪富人、爲觀游、及賣果者、皆爭迎取養視。

駝所種樹、或移徙、無不活。且碩茂、蚤實以蕃。他植者、雖窺伺、傲慕、莫能如也。有問之、對曰、橐駝、非能使木壽且孳也。能順木之天、以致其性焉爾。凡樹木之性、其本欲舒、其培欲平、其土欲故、其築

欲密。既然已、勿動、勿慮、去不復顧。其時也、若子、其置也、若棄、則其天者全、而其性得矣。故吾不害其長而已、非有能碩茂之也。不抑耗其實而已、非有能蚤而蕃之也。他植者、則不然、根拳而土易、其培之也、若不過焉、則不及、苟能有反是者、則又愛之太恩、憂之太勤、旦視而暮撫、已去而復顧。甚者、爪其膚、以驗其生枯、搖其本、以觀其疎密、而木之性日以離矣。雖曰愛之、其實害之。雖曰憂之、其實讎之。故不我若也。吾又何能為哉。

問者曰、以子之道、移之官理、可乎。駝曰、我知種樹而已。理非吾業也。然吾居鄉、見長人者、好煩其令、若甚憐焉、而卒以禍。旦暮吏來而呼曰、官命促爾耕、勗爾植、督爾穫。蚤繰而緒、蚤織而縷、字而幼孩、遂而雞豚。鳴鼓而聚之、擊木而召之。吾小人輟飧饗、以勞吏

殫養

者、且不得暇。又何以蕃吾生而安吾性耶。故病且怠。若是則與吾業者、其亦有類乎。問者嘻曰、不亦善夫。吾問養樹、得養人術、傳其事、以為官戒也。 (柳宗元 八大家文)

二四 世界の四聖 (二)

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人にあらずんば誰かこれを能くせん。釋迦、孔子、ソクラテース、基督の四人、世呼んで世界の四聖と稱す。宜なるかな。

釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生まる。父は淨飯王、母は麻耶夫人。その本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にて、佛陀はその出家成道後の

正覺

釋迦佛石像

*ヒマラヤ山の南麓ガンダマ河の上流一帯の地

巡錫



尊號なり。釋迦身は一國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潜め、二十九の歳その妻子を捨て、城を逃れ、山林に隠れ道を修むること六年、終に人生の奥義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に没しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど徒に思索の高遠を欽びて人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とによりて安心の道を求めたり。その流派を樹て、相争ふ所は畢竟名目の優劣のみ。未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、その廣大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、衆民をしてその歸依する所を知らしめたり。

歸命

歸依

孔子名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去る二千四百餘年の昔、支那の魯國に生まる。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり。學徳愈進む。魯の定公の時に至り、擢てられて大司空の職に就く。治績大いに擧がり、内外その風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴くを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を

*景公

魯國の日に盛大に赴くを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を

用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方の遊説を試みぬ。



孔子の像

當時の支那は所謂春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地をはらへり。或は臣にしてその君を弑するものあり、子にしてその親を害するものあり。強は弱を呑み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頹廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出て、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻さんとす。志や高か

陵夷

つ大なりと謂ふべし。かくの如くにして、四方を漂浪するこゝと十三年、時非にして道容れられず。世また耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て、己むを得ず老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く「嗚呼、吾が道遂に窮す。世遂に吾を知るもの無きか」と。門弟子貢慰めて曰く「何ぞ夫子を知るもの無からんや」。孔子答へて曰く「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。吾を知るものはそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病ふ。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えん」と。後幾ばくもなくして歿す。時に年七十三。

ソクラテースは希臘雅典府に住める一彫刻師の子なり。その生れたるは凡そ西曆紀元前四百七十年の頃にして、釋

詭辯

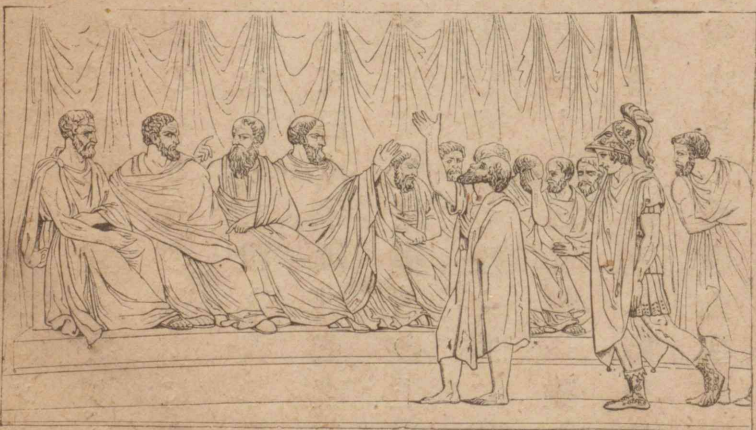
ソクラテースの肖像



迦孔子と年を隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に留まり、道德は空文の上のみにみ貴ばれたり。その状なほ釋迦當時の印度の如く、人生社會の實際に關して殆ど裨益する所無かりき。ソクラテースは慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず、詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て辯難攻撃して一歩も假借せず。侃諤の正義は、その稀代の雄辯と相伴ひて一世を風靡せり。

諄々 侃諤

然るに「喬木は風に折らる」といふ喩に漏れず、羣小のソクラテースに快からざるもの相計りて、國法に背けるものとしてソクラテースを讒訴せり。その訴狀に曰く「ソクラテースは國教を信ぜずして異教を徧め以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし」と。ソクラテースが時の讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふると



ころ、語々百世の眞理ならざるは無し。然れども判官はソクラテースを以て傲慢不遜なりとなして死刑を宣告せり。ソクラテース泰然として驚かず。曰く「命のみ」と。その獄中にあるや、常に門弟子を集めて生死・靈魂・未來の事を説き、人の脱獄を勧むるものに對しては輒ち答へて曰く「予は唯正義に導かれんのみ。死又何爲るものぞ。人生の幸福は靈魂の上に在るを知らずや」と。終に從容として毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテース曰く「爾一雞を以てアスケレピアスの神に捧げよ」と。蓋し會病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしが爲ならん。希臘の聖人ソクラテースはかくの如くにして逝きぬ。年七十。

希臘の醫術
の保護神

*エルサレム
市の西南五
哩半

福音

基督は本名耶蘇といふ。基督とは「膏灌がれたる者」といふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり。猶太のベツレヘムに生まる。その生後四年を西歴の紀元第一年となす。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリヤといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間猶太の各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずしてその福音を傳へたり。抑、當時は羅馬帝國の榮華その極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異荐りに至りて、天下寧日無し。殊に基督の故國なる猶太は久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇の淫祠を崇拜して益、放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を

惑はずのみ。こゝに於て一世の人心は、悉く偉人の現出してこの暗黒の社會を照破せんことを渴望せり。基督この間に

基督の肖像



生れ、自ら救世の使命を負へる神の子と稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶・學者・官吏等はこれを喜ばず、以て猥りに新法・異説を唱へて民を迷はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。基督豫めこの事あらんを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りて曰く、神よ、彼等を許せ。かれ等はその爲すべき所を知らざればなり」と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、^{*}エルサレムパレスティナの都府地中海岸より東方約三十五哩の女子よ、吾が爲に哭くこと勿れ。唯おのれとおのれの子との爲に哭け」と。かくの如くして基督は三十三年の短命を以て十字架上の露と消去りぬ。基督の死後、その弟子等は激烈なる迫害に抵抗してその教を天下に弘む。基督教即ちこれなり。

二五 世界の四聖 (二)

以上は四聖の略傳なり。その人物・事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し崇拜すべき所なり。四聖の中釋迦を

除きては、何れも轆轤不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく咏歎の間に歿せり。ソクラテースと基督とは何れも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に磔殺せられたり。慘愴なりと謂ふべし。然れども、これ等の人の志す所は天下後世に在り。現世の禍福と一身の安危とは毫もその顧慮する所にあらず。故にその死に就くや、晏然として猶歸するが如し。孔子はその身の不幸を憂へずして、却つて「吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えん」と嗟歎せり。釋迦は衆生の爲に妻子と王位とを抛ちて食を路傍に乞へり。ソクラテースは死罪の脅迫に遇うて揚言して曰く「正義を信ずる者に

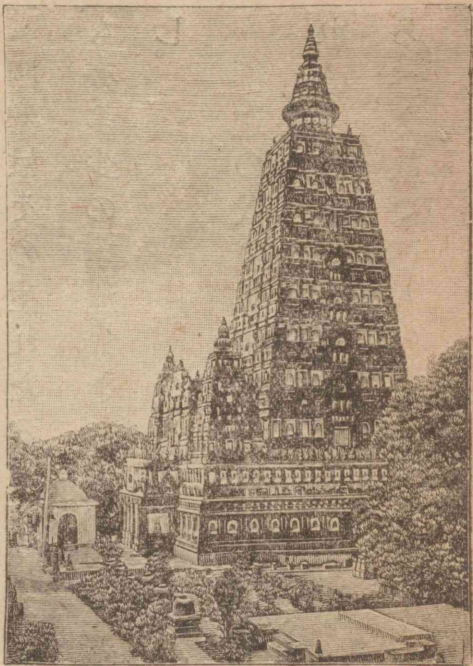
とりて死はた何爲るものぞ。われをして一日の生あらしめんか、その一日即ち國民の迷をさまさざるべからず」と。基督は己を罪に陥るるものゝ爲に神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈悲の廣大にして無邊なる。

四聖はその生れたる處と時とを異にす。故にその教理にも亦多少の差違無きを得ず。今その要略を擧ぐれば左の如し。

煩惱

釋迦の教理は煩惱を斷滅して涅槃に達するを旨とす。それ人生は苦に始まりて苦に終る。生・老・病・死、孰れか苦に非ざるべき。故に吾人は現在を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾に在り、情の原因は「我」の一念に執するに在

アタガヤの
塔菩提樹下
の靈地



り。故に吾人は「我」の一
念を脱卻して無我無
念の境界に達せざる
べからず。これ人生究
竟の樂地にして、涅槃
即ちこれなり。

孔子の教は身を修

め家を齊へ天下を治むるに在り。而して身を修むる基は孝
に在り。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、
長幼の序、朋友の信、皆これに本づく。人は生れながらにして
美徳を天に稟くれども、後天の氣質によりてこれを完うす

古之欲明明
明德於天
下者、先
治其國、欲
治其國者、
先齊其家、
欲齊其家者、
先修其身、欲
修其身者、先
正其心、欲正
其心者、先
誠其意、
(大學)

孝百行之本
(古文孝經)

ること能はざるもの多し。教育の要こゝに於てかあり。既に
教育を受けて身既に修まらば、家おのづから齊ふべく、家齊
はば國おのづから治まるべく、國治まらば天下おのづから
太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始まり、治
國平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテースの教は所謂知徳合一説なり。思へらく「真正
の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。
知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、其の
知識・道德の真正なるものに非ず。眞理を確信し、その實行を
以て最上の義務となせば、正義おのづからその中に在り。正
義は靈魂の満足なり。而して靈魂は肉體と異にして不朽不

滅なるものなり。故に人の正義を行ふ、現世の利害は決して顧慮すべきに非ず。道德は富貴の爲に存せず。然れども富貴は道德の中に在り」と。

基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。曰く

『心の貧しきものは福なるかな、天國はその人の有なればなり。悲むものは福なるかな、その人は慰めらるべければなり。飢ゑ、渴く如く義を慕ふものは福なるかな、その人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな、その人は憐みを得べければなり。心の清きものは福なるかな、

その人は神を見るべければなり。惡に適すること勿れ。人若し汝の右の頬を打たば、左の頬をも轉じてこれに向けよ。汝の鄰人を慈みて汝の敵を愛せよ。人に見せん爲に義をその前に行ふこと勿れ。右の手に爲す所を左の手に知らしむること勿れ。偽善者の行に倣ふこと勿れ。隠れたるを鑑み給ふ神は顯はに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非すること勿れ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。叩け、然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る門はその路大きく、これに入るものは多し。嗟呼いかに生命に至る

門は窄く、その路は細く、これを得るものの少きぞや。凡そこの訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざる者は、沙上に屋を架せる愚人の如しと。

基督教の精髓は、後世の人如何なる色彩を加ふとも、畢竟この山上の垂訓を出でず。

かくの如きは四聖の傳説及び教義の大要なり。嗚呼四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してこの教の今なほ凛々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠の救濟者なりと謂ふべし。その遺徳の高大なることそ

れ何を以てこれに比せんや。

(高山樗牛 樗牛全集)

練習一、左の語句を解釋せよ。

- 狂瀾を既倒に廻す 老脚蹉跎たり 侃諤の正義を唱ふ
 - 徒に詭辯を弄す 無我無念 知徳合一 山上の垂訓
 - 二、蕩然として 慨然として 安然として 昂然として
- を用ひて四つの短文を作れ。

實業新日本讀本高級用卷一終

大正三年十二月十六日印刷
大正三年十二月二十日發行



著者 六盟館編輯所
 發行者 合資六盟會社
 右代表者 杉本七百丸
 印刷者 高橋郁
 東京市日本橋區鐵砲町三番地
 東京市京橋區弓町二十五番地

實業新日本讀本
 定一二三四 各金貳拾五錢
 五六一七八 各金貳拾七錢
 價上級用一二各金貳拾七錢

大正八年度臨時定價
 一二三四 各金參拾參錢
 五六一七八 各金參拾五錢
 上級用一二各金參拾五錢

發行所

東京市日本橋區鐵砲町三番地

合資六盟會社

振替口座東京一二五五〇番

電話區神田三三四番

販賣所 全國府縣下各書肆

広島大学図書

2000054283

